

トップページ > 研究ノート・研究会レポート一覧 > 【コラム】メタバースを利用した発話活動 —外国語学習への不安を和らげるアバターの効果—

 このページを印刷

研究ノート・研究会レポート一覧

ARCLE理事によるコラム、第8回は、文教大学・金森強先生です。

【コラム】メタバースを利用した発話活動 —外国語学習への不安を和らげるアバターの効果—

金森 強 (文教大学)

[2024年度](#)
[2023年度](#)
[2022年度](#)
[2021年度](#)
[2020年度](#)
[2019年度](#)
[2018年度](#)
[2017年度](#)
[2016年度](#)
[2015年度](#)
[2014年度](#)
[2013年度](#)
[2012年度](#)
[2011年度](#)
[2010年度](#)
[2009年度](#)
[2008年度](#)

はじめに

人前でスピーチをしたり会議で自分の考えを述べたりすることには心理的抵抗を感じるものである。自分の想いや考えをうまく伝えることができるか、活舌が悪くなったり、話す内容を忘れてしまったりしないかと不安になるからである。外国語学習においても、特に発話活動の際に同様の不安を感じる事が起こる。文法や発音の正確さを意識したり、他の学習者と自分の英語力を比較したり、また、指導者や他の学習者からの評価を気にしたりすることで、不安や緊張が高まり、学習効率や学習成果が落ちてしまうことにつながりかねない。結果的に英語学習への動機づけや自己肯定感が下がることさえもある。

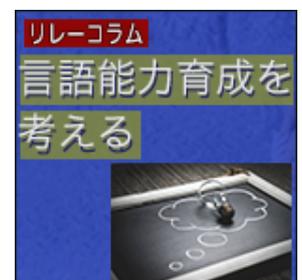
発話活動には聞き手の存在があり、相手の理解や反応によって、その場で評価が下されることにもなる。そのため、間違えたり、表現できなかつたり、うまく伝わらなかつたりすることが続けば、自身の能力の不十分さが明らかになり、情意フィルターが高くなり、発話活動への取り組みに消極的になるのも当然と言えるだろう。

このような外国語による発話活動への不安を和らげる方法の一つとして、自分の顔を隠し、アバターの姿として会話を行うメタバースを用いた活動は、発話への情意フィルターが下がり、活動量や活動への主体性の高まりが期待できる。以下、メタバースを利用した発話活動の実践報告（中間）から、メタバースの英語教育への利用の可能性を考えてみたい。

メタバースを利用した教育の先行研究

メタバースを用いた教育の長所として、学習者の学びへの興味を刺激すること、グループ活動や協働学習、学習者と指導者のインターアクションを促進すること、学習成果が向上すること等が挙げられる。ただし、言語教育に関する研究は十分には進んでおらず、今後、多くの実証的研究が行われることで、その成果に基づいた新たな教育実践が期待されることである。特に、日本の初等中等教育レベルにおける研究においては、不登校児を対象にした教育・支援等へのメタバース利用の取り組みはあるものの、各教科教育におけるメタバースの活用はあまり進んでいない段階だと言える。

倉田（2024）は、離島の小学校教員に対するアンケート調査から、指導者がメタバースを利用した教育活動において期待する資質・能力を「自律的な行動力」「コミュニケーション能力」「情報活用能力」「思考力」「表現力」「好奇心」「広い視野」としてまとめている。言語教育・外国語教育への活用につながる研究でもあり、倉田氏に本研究への専門知識と氏が作成したメタバース空間：ハワイのビーチをイメージした空間の提供をお願いすることとした。



さらに、メタバースを専門的に扱っているリプロネクスト社（代表・藤田献児）と「教育におけるメタバース利用に関する共同研究」を進める締結を行い、メタバース空間（デパート、フードコート、会議室等）の提供、メタバース使用に際して、事前の指導・説明、実施の際の補助をお願いすることとした。これまでにリプロネクスト社がサポートして実施してきた鹿児島大学教育学部附属小学校、浜松市立西小学校、また、杉並区立堀之内小学校における英語授業の取り組みの情報等から実施の際のインターネット環境等のハード面、事前に共有すべき情報等に関する条件整備を整えることで、スムーズに進められるように準備を行った。



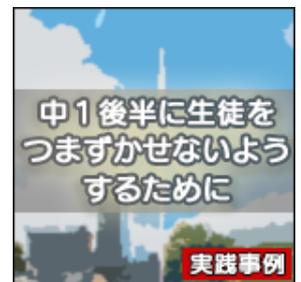
実際の取り組みと成果

沖縄県名護市の教育委員会に研究活動への協力を依頼し、小学校、中学校の数校において、メタバースを利用した英語によるコミュニケーション活動の実施に向けた具体的な準備を始めた。必要となる環境整備や指導者への説明の後、実際にメタバースにおけるコミュニケーション活動に立ち合い、観察評価を行うとともに児童生徒・指導者へのアンケート調査等から以下の6つの仮説検証を行うことを目的として授業を実施した。本コラムでは、研究の中間報告として、指導者の感想や観察することから見えてきた部分のみを述べるにとどめる。



【仮説】

1. アバターとして外国語を使用することで、情意フィルターが低くなり、積極的な発信が増える。
2. 顔の表情やジェスチャーから得られる情報がなくなるため、相手の話をよく聞き、情報を正しく処理するために音声への意識が強められ、聴く姿勢が身につく。
3. 顔・ジェスチャーが見えない分、他の方法（リアクションボタン、声のトーン、プロソディ、繰り返し等）を用いて表現の工夫を行ったり情報を得るための工夫を試みたりすることで、話し方（パラランゲージ）やコミュニケーション方略、ターンテイキング、フィードバックの大切さや役割に気づく機会になり、結果として、実際の対面によるコミュニケーションにも影響を与える。
4. キーボードを操作し画面を見ながら行うことで、ゲーム感覚で体験することができ、学習が「楽習」になり、英語を学ぶことへの興味・関心が高まる。
5. メタバース空間での交流への興味が高まることで、英語学習への興味が高まることにつながる。
6. 画面上で自身の会話活動を第三者の視点で見ることになり、対話活動の捉え方や取り組み方が変わる。



【実際の活動】

- 協力者：名護市内の小学校4校（計70人）、中学校1校（17人）、文教大学教育学部3・4年生（のべ60人）・大学院生（2人）、大学教員（3人）、名護市教育委員会指導主事（1人）、情報教育支援員（3人）、小中学校外国語科教員（5人）、ALT（1人）
- 実施の方法とグループ分け
 - 各学校単位で、日程・クラス数・人数を調整して実施。
 - 一つの空間に入る総人数の上限を12～13人とした。
 - 空間内にいる学生・教員数を5人以下にし、ニックネームをアルファベットで表示。
 - 児童・生徒の数に応じて、いくつかの教室に分かれて実施（WiFi環境の影響を受けにくくなる）。
 - 情報教育支援員によるサポート体制を整える（フリーズしたり間違っで退室したりした場合の支援）。
- 発話活動
 - 指導者が、既習の言語材料を用いた言語活動案：単元をまたいで行うタスク活動を提案。
 - タスク例：
 - ・人気のフルーツパフェを考える ・お互いの自己紹介を通して友達になる
 - ・相手の人の住む場所を特定する（学生はヒントになることだけを言う）
 - ・お互いの推しを紹介しあう
 - * 大学生・院生・教員には、児童生徒の発話へのリアクションやフィードバックを丁寧

に行うこと,リキャストを試みること,メタバースでの出会いの機会を心地良い体験にすることをミッションとした。

- 実施日
2024年11月1日,11月26日,2時間目~4時間目

活動における指導者の感想・取り組みに関して出された課題

【指導者の感想】

- 普段の教室内における言語活動と比べると積極的に活動に取り組む姿が見られた。
- 丁寧なフィードバックを得られたり簡単な質問に英語で答えられたりすることで達成感が高い。
- 相手意識が高まり普段より会話時間が長くなっている。
- 相手の話が終わるまでしっかり聞いて反応しようとしている。
- リアクションボタン（ジャンプ,手を振る,ダンスをする等）を工夫しながら利用している。
- 普段の英語の授業・活動にあまり興味を示さない学習者が積極的に取り組む姿が見られた。
- コミュニケーションを取ることが苦手な子どもが普段とは違う姿を見せている。
- 活動後,またやりたいと言う声が多くあがり,メタバースでの言語活動を楽しんだことがわかった。
- 海外や他の地域とのメタバースを利用した交流等を期待する声が聞かれた。
- 他教科へのメタバースの利用の可能性が感じられた。
- パフォーマンステストではうまく応答しなかった児童が声を出して活動をしていた。パフォーマンステストに利用することを考えたい。（A L T）

【実施した取り組みに関する指導者から出された課題】

- メタバースの操作に慣れるための簡単に理解できるマニュアルと十分な練習時間が必要。
- 活動中に操作を間違ったりWiFiのつながりがうまくいかなくなったりすることから活動の継続が難しくなることがあった。（ICT支援員のサポートが必要となる。）
- 大学生からの質問が児童にとって難しく感じられたという児童生徒からの感想があった。

まとめ

メタバースの利用に際しては,参加者への事前の説明を十分に行い,指導者,学習者ともにその利用に慣れるための時間や練習が必要となること,情報リテラシー教育の実施,WiFi環境やクラスサイズに応じた教室数の準備,ITC支援員のサポート等が肝心となる。

小学生と中学生のやり取りの活動を実施した他の取り組みでは,会話が途中で途切れたり,理解できない,あるいは,十分に伝えきれないままに終わってしまったりすることがあったようだ。しかし,今回話す相手は,教員であったり,教育学部の学生であったりしたので,小学校の英語授業の目的や内容が分かっており,ファシリテーターとしてのミッションを遂行するために丁寧なフィードバックやリキャストがあったことから,児童生徒が安心して活動に取り組むことが可能となり,会話を弾ませ,会話を継続させることにつながり,達成感を高めることにつながったようである。

普段,コミュニケーションを持つことを苦手とする学習者がメタバース空間において現した姿から,アバターを用いることの利点が見えてきた。英語による発話活動への不安を少なくするためにメタバース空間における活動を効果的に利用する指導方法・教材の開発が期待される。

さいごに

ICTが劇的な発展を遂げる中、教室の中の閉ざされた授業に固執する必要はない。教科書と黒板とチョークと私（教師）の授業だけではなく、ICTを効果的に用いて実社会につながる多様な授業・教材の創造が期待される。対面で開催される教室における英語授業の良さを活かしながら、ICTを効果的に用い、個別最適な教育と協働的な学習の一体的な実現を目指した英語教育の在り方を探り続ける必要があると言える。メタバースを利用した英語授業の研究を継続して行い、効果的な利用のための情報提供、授業案・教材等の提案を行いたい。

参考文献

Liangjie Fan, Juiching Chiang (2023). "A systematic review of the application of metaverse in language education: Prominent themes, research methods, impacts, and future challenges" *Journal of Language Teaching*, 3(10), 1-14, <https://doi.org/10.54475/jlt.2023.026>

Lourdes Ortega(2009). *Understanding second language acquisition*. Hodder Education

Ming Li and Zhonggen Yu "A systematic review on the metaverse-based blended English learning" *Frontiers in Psychology*
<https://www.frontiersin.org/journals/psychology>

加納寛子 (2024) . 「メタバースを活用した教育の可能性 –不登校の児童生徒を対象とした授業や教員養成を目的とした授業の報告-」 *日本情報教育学会誌 『情報教育ジャーナル』* Vol. 5 No. 1

倉田伸他 (2024) . 「離島の小学校の教師が期待するメタバースでの学びの検討」 *日本教育工学会 2024年 秋季全国大会 プロシーディングス*

* 2024年度文教大学教育学部共同研究費（競争枠）による「外国語教育にメタバースを用いることの効果に関する実証的研究—学習者の発達段階や特性に応じた効果的な指導法・教材の開発のために—」の中間報告である。 研究代表者：金森強,共同研究者：奥村真司,土肥麻佐子,福田スティーブ利久

[🔴 ページトップへ](#)

» [個人情報保護への取り組みについて](#) » [利用者情報の取り扱いについて](#)

ARCLE/アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です。 Copyright © Benesse Corporation, Inc. All rights reserved.